

元來刺繡の仕事は男子のすることであり、女子は只補助するに過ぎないから其の作品も下等物に限られ外國向の中では値安い金縫の椅子掛、肩掛、布團、寢衣の類、内地需用のものでは半襟などであるが之として上等のは男の手になる刺繡の時間賃は輸出向の最下等は一枚三十錢内外で上等は無制限、半襟類は最下等一枚十二三錢で上等は一枚十圓近くなるが今云ふ通り上等は凡て男の手になるから女子の収入は一月五圓以上十圓以内である、尤も此の外に軍人服の刺繡あつて軍服の附屬品即ち肩章袖章、肋骨章などを縫ふから女子の賃銀は一日二十錢乃至三十錢になる。



附録

女子教育學費の統計

文明の進歩と共に、女子教育愈々發達し、社會は中等教育以上の學力を女子に要求しつゝあり、されば今後の父兄たるものはよく此處に留意し、以て其女子を教育せざるべからず、女子夫れ自身も亦た心して勉學し一人前の婦人となるを期せざるべからず。今左に女子教育系統及び修業に要する費目概算を列し、一は以て父兄の參考に供し、また女子修業の枝折となさんとす。

○女子教育系統概覽

を示せば左の如し

年 期	自 至	限 年
3-4	1	一
4-5	2	二
5-6	3	三
6-7	4	四
7-8	5	五
8-9	6	六
9-10	7	七
10-11	8	八
11-12	9	九
12-13	10	十
13-14	11	十一
14-15	12	十二
15-16	13	十三
16-17	14	十四
17-18	15	十五
18-19	16	十六
19-20	17	十七
20-21	18	十八
21-22	19	十九
22-23	20	二十

(女子師範學校及び職業學校)

(女子高等師範學校)

(同研究科)

幼稚園
尋常小學校
高等小學校

第二學年
第四學年

〔附録〕女子教育學費の統計

〔附録〕女子教育學費の統計

高等女學校(及同程度の學校)

女子大學(及同程度の學校) 本科 研究科

(備考) (一) 黒線を以てせる 普通多數の修學順序を示したるものにして、横の波線は其連續を表す。(二) 双線は特種なる學校にして比較的一般的なる學校を表はせり。(三) 學術の點に於ては入學の資格あるも年齢の制限あるものは、年齢によりて劃せり、女子高等師範の如きもの即ちそれ。(四) 私立學校をも記すべからんも、各相異なるが故に須く除けり表中「同程度の學校」とあるにより参照せられよ。

○修業年限及年齢

以上の概算により各教育の期限及び年齢を再記すれば左の如し、但し便宜上「幼稚園」と大學の「研究科」を除く。

義務教育(尋常小學校卒業迄)	期限四箇年	年齢十歳
初等教育(小學校高等科第二年迄)	同六箇年	同十二歳
中等教育(高等女學校卒業迄)	同十一箇年	同十七歳
高等教育(女子大學校卒業迄)	同十四箇年	同二十歳

更に特種教育に就て記すれば

華族女學校(小學校より卒業迄)	同十二箇年	同十八歳
女子師範學校(小學校より卒業迄)	同十二箇年	同十八歳
高等女子師範學校(同上)	同十五箇年	同廿一歳
但女子師範は小學卒業後(十四歳)一箇年、女子高等師範學校は四箇年年限の高等女學校及同程度の學校卒業後(十六歳)一箇年の間を置く。		

○學費概算

此調査を基礎として、學脩上必須の費目を概算すれば左の如し(但東京に於て)

幼稚園	一箇年間平均 約二十圓	卒業迄 約六十圓
尋常小學校	約二十五圓	約百圓
高等小學校	約三十五圓	約七十圓
高等女學校	約三十七圓	約百四十五圓
女子大學校	約五十圓	約二百五十圓
女子大學校	約八十五圓	約二百五十五圓

〔附録〕女子教育學費の統計

女子大學校研究科

約七十五圓

約二百二十五圓

(備考)幼稚園は高等師範學校附屬幼稚園に於て調査し、其他は夫れく二三乃至四五の學校に就て、女子大學校は五人の卒業生に就て調査せるもの、平均額なり。若し必須費目の外に要する費用即ち袴、草履、靴、辨當、手拭等の如きものを始め雜費等を計算すれば倍額以上に上るもあらん、而して寄宿或は下宿をなすが如きならば、卒業迄

寄宿料及舍費

下宿料

高等女學校

最多豫算 三百八十五圓
最少豫算 三百圓

三百八十五圓

五百五十圓

三百圓

三百三十圓

女子大學校

最多豫算 三百三十圓
最少豫算 二百圓

三百三十圓

二百三十圓

二百圓

二百圓

○各教育期の必須費目

(寄宿、下宿料をも除ける)を概算すれば左の如し、但し「幼稚園」及「研究科」を除くこと前項の如し。

義務教育(説明は前々項に同じ)

約百圓

初等教育(同上)まで

約百七十圓

中等教育(同上)まで

約四百二十圓

高等教育(同上)まで

約六百七十五圓

合計

約九百三十圓

右の如くにして、若し、幼稚園、女子大學研究科を加へば、前後二十年間の必須學費の合計は、約一千百十五圓

を要す。尤もこは、再三云へる如く、必須の費用のみなれば、辨當、風帽敷、往復費、學校臨時費の如き種目を算せば前記の額以上に上るは勿論のこと、す、一女子をして、相當の人物たらしむる豈に容易ならずとせんや。

若し地方より出で、寄宿下宿をなして修業などせば其學費は左の如き多額に上らん(高等女學校以上)

高等女學校

最多額 六百三十五圓
最少額 五百五十圓

寄宿 六百三十五圓

下宿 八百圓

女子大學本科

最多額 四百八十五圓
最少額 四百三十五圓

四百八十五圓

五百八十五圓

合計

最多額 千二百二十圓
最少額 九百八十五圓

千二百二十圓

千二百八十五圓

但學校用具費をも加算す。

○特殊學校

此のほかに縫、刺繡、割烹の如き實科に志すもの、或は音樂、繪畫、彫刻其他を修めんとするもの等もあるべし。今一々之を記するは極めて煩なれば、唯だ其中の重なるもの二三を左に記載すべし。

音樂(東京音樂學校) 年齢十四年以上、學科は豫科一年、本科三年、研究科二年とす、費用中等教育に準じ、外に多少の増加あるべし。
美術(女子美術學校) 本科、普通科各三年、高等科一年乃至二年、費用は高等女學校と大學の中間なるべし。

語學(女子英語學) 年齢十五年以上中等教育の卒業生は入學し得べし、修業年限は三箇年にしてまた小學時代より特殊教育を施すは華族女學校にして、大要左の如し。
初等小學三年、高等小學二年、初等中學三年、高等中學三年、各學科通じて二十年にして十八九歳を以て卒業し得べし。

女子遊學便覽大尾

明治三十九年八月二日印刷
明治三十九年八月五日發行

正價金參拾錢

不許複製

編者

中村千代松

發行者

野口竹次郎

印刷者

松本魁

印刷所

東京市京橋區宗十郎町十五番地
會社 東京國文社

發行所

東京市京橋區大鋸町十二番地
電話 本局六〇七番

女子文壇社

特賣所

東京市神田區表神保町 東京堂
同京橋區尾張町二丁目 東海堂
同日本橋區吳服町 北隆館合資會社
同神田區裏神保町 上田屋書店
同京橋區中橋廣小路 前川文榮閣
同京橋區餘屋町 夏明堂

是より以下は女子文壇社出版書目

▲女の子ある家では必らず女子文壇を見て居ます
文壇社先生、帝國大學講師佐々木信綱先生、山中古洞先生、廣津柳浪先生、河井醉茗先生、外編輯局

- 選評大家
 ●論文 ●抒情文 ●敘事文 ●消息文 ●新體詩
 ●はがき文 ●和歌 ●短篇小說 ●俳句 ●新歌謠
 ●新笑話 ●圖畫
 (規定は本誌に就て一覽を乞ふ)

每號東宮妃殿下御覽



女子文壇

自宅
練文
隨一

和習書手本、寫真版挿入

每號口繪三宅克己先生水彩畫。錦木清方先生繪端書。洋習書手本、寫真版挿入

每月一回(一日)發行 外に年四回増刊(二月、五月、八月、十一月) 一冊菊判百三十頁

定價 十二冊前金壹圓八錢 (増刊除ク一年分)

〇八冊前金七拾六錢 (増刊共半年分)
〇十六冊前金壹圓四拾四錢 (増刊共一年分)

(直接申込に限り 全國郵税不要)

見本一冊 拾錢送る

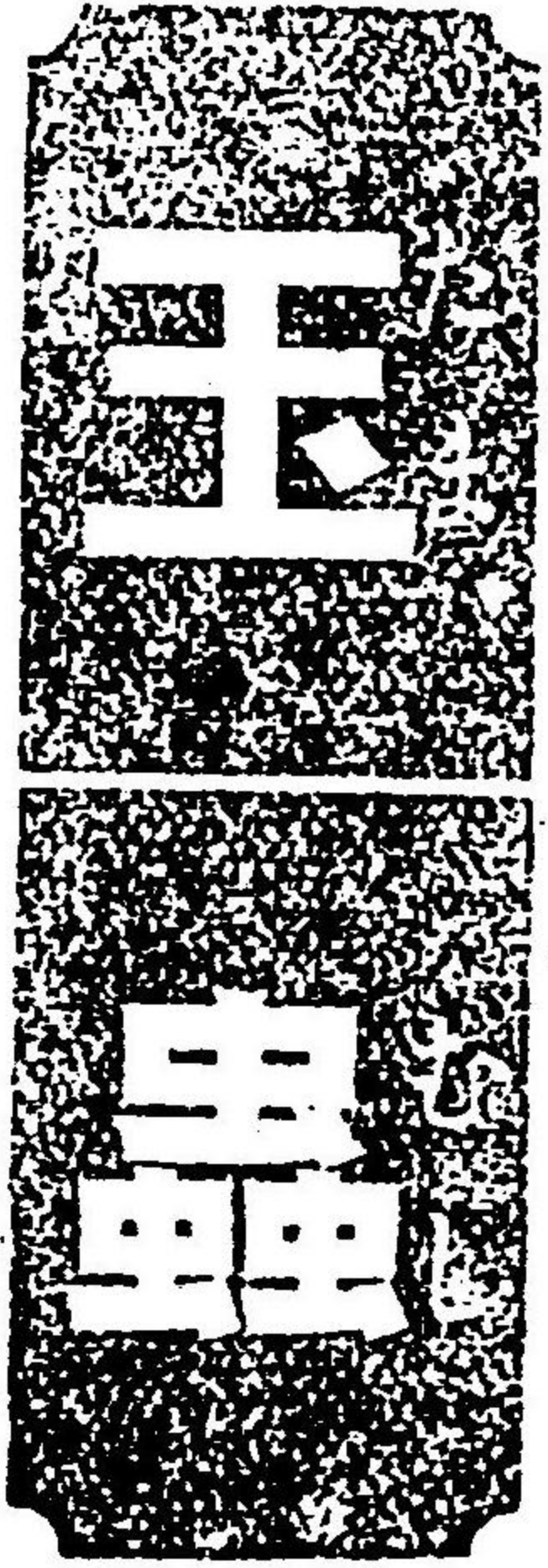
▲一等安くして爲になるのは女子文壇であります

河井醉茗君著

山中古洞君畫

表紙意匠及アート紙 原色密刷口繪入 (三十九年七月新刊)

詩と美文



全一冊新式製本色クロー、ス金箔、色箔入、頗優雅 (正) 價金六拾錢、郵税六錢 特別賣價五拾錢 郵税不要

▲『日本』曰く。醉茗は新體詩人として名あれども亦其文章温藉にして情味あり和氣あり而して詩趣あり其妙多く其詩に透らざるなり(中略) 明治女子の文章を作る参考書としては舊式ならずさればとて浮薄飾飾の分子を含まず最も恰好たるに庶幾からん

▲『萬朝』曰く。女子習文の爲に自作より女子又は家庭を材とせるものを採取せりといふ著者の小品文は其の新體詩と共に温優掬すべきものあり

▲『國民新聞』曰く。温雅にして清麗なる筆致は卷中に溢れて濃厚なる著者其人を目前に見る如き心地する節も妙からず覺ゆるなり

▲『都新聞』曰く。クラシックなるありロマンチックなるあり叙情あり叙事あり神秘的なるもの教訓的

なるもの神話童話寫生及び日記文形はそれごとく異れども純潔温雅なる氏の特色は何れの篇にも現はれて趣き洵に深し

▲『女學世界』曰く。篇中朝餐晩餐の一節並に愛子の死などいふ處を讀んでは成程と思はず巻を措いて感服しました醉茗君は誠に眞情の人である眞情を流露して文をつくる何人か感ぜざるものあらんや彼の形容瀟山な文字細工を専一とする文章家の連も眞似る事は出来ないう處である婦人や家庭の趣味を養ふには誠に此上もない好作である

▲『明星』曰く。醉茗氏の文は疎疎として雅菊の香を嗅ぐ如く輕浮の氣なきを喜ぶ

▲『婦人世界』曰く。何れも婦人のために書いたものですから綺麗なものばかり體裁もなかく凝ったものです

▲『婦女新聞』曰く。所々奇警なる觀察を寫してある自然界の何物をか解せんとする所眞に味深し

▲『新公論』曰く。近時この種の出版多しと雖、本書の如く清新のものには罕なり廢城、演名潮物語な如きは鏡花の小説にありさうなる結構なるも鏡花の小説よりは遙かに詩的の文字に富つたり予は今日より愛讀の書一冊を加へたるを欣ぶ

▲『秀才文壇』曰く。今の女學生諸君が危險なる戀愛小説などを排して斯かる趣味あり實益ある書物に親まれれば其資する所妙からざるべし

▲『文章世界』曰く。女子座右の伴侶としてこれに過ぎたるものはあらざるべし

玉晶し評判記

女子文壇社出版書目

▲女子作文の良材▼

(卅九年一月新刊)

文學士中内蝶二先生序文
當代名家選評

女子文壇編輯局校訂

好評第三版

子女懸賞文集

全一冊四六判
上等紙四百二十頁洋裝美本
廉價
金廿五錢
郵送料不要

此書は女子が文章を模範的の作文書として唯一の寶典たるべし
練り詩歌を學ぶに 諸大家の作文上の心名文載せ、修養の便に供第參版成る陸續注文を乞ふ
得となるべき
○短篇小説(三七)○消息文(三五)○抒情文(三三)○叙事文(三三)○論文(十五)○新體詩
○和歌(三五)○俳句(四十四)○はがき文(三八)○圖畫(二七)○附録——大家文集(七)
計十一項……三百〇七題

鈴木秋風君著

太田三郎君畫

(三十九年六月新刊)

小説美文

朝

晴

全一冊新式製本本綴
洋裝密書入頗優雅
正價四十五錢、郵税四錢
特別賣價四拾錢
郵税不要

▲「萬朝報」曰く どれも是れも極めて温雅な文體で女學生の好きさうな冊子なり。

▲「都新聞」曰く いづれも短篇の小説ながら、著者が所謂寂寞の歴史に得たる感興と省察とは、能く此裡に露はれたり。

▲「女學世界」曰く 新たに發行したる少女趣味の小説で何れも未だ浮世の荒波にもまれない青春の女の幽情を寫したるものです。

▲「わかぐさ」曰く いづれも取りぐにやさしく、美はしく書きなされて、心地好き作のみなり。

▲「女子文藝」曰く 綠蔭讀書の好資料として諸嬢に勧めたきは、此書なり。收むる處の十四篇の小説、悉く艶麗、絢爛にして、温情、穩健の趣あり。

▲「新古文林」曰く 長篇短篇とも、取りぐに面白く、おっとりとした上品な處が此著者の特質である

らう。すらくとした書きぶり、一息に終まで讀み了らせて了ふ。

▲「ハガキ文學」曰く 若き作者の情熱は、溢れてこの絢爛艶麗の文字とはなりにけむ。綠蔭の愛讀書としてこの可憐なる小冊子を勧めむ。

▲「帝國文學」曰く 近來の小品文に付き纏ふ厭味の無いのは可い。

▲「婦人世界」曰く いづれも美しき美文小説を集めたるものなり。

▲「女の友」曰く なんとなく可憐な讀みもので、印刷も中々奇麗に、紙質も上等、何から何まで申分がなす。

▲「繪畫研究叢誌」曰く 西の國の詩巻を見るらむ心地す。

▲「母の會雜誌」曰く 挿畫はお嬢さん達が繪畫を學ぶのにも、よいお手本となります。

批 評 一 斑

女子文壇社出版書目

女子獨習の最良手引書

國學院學士 小森松風先生著

(卅九年七月より隔月出版) 一冊菊判二百三十頁

女子文學全書

全部拾貳卷

紙數二千七百頁 每卷讀切 洋裝美本 振假名付

正價 一冊金參拾錢 ● 三冊前金八拾五錢 ● 六冊前金壹圓六拾錢 外郵稅一冊四錢 ●

全部 十二冊前金 金參圓 郵稅不要 (郵券代用) (壹割増)

全部目次

東宮侍講本居豐顯先生題詠
學習院女子部長下田歌子先生題歌
文學博士小杉楯邨先生序文
▲第一編 美文作法 既刊
理學博士坪井正五郎先生序文
山田美妙先生序文
▲第二編 言文一致文範 刷中

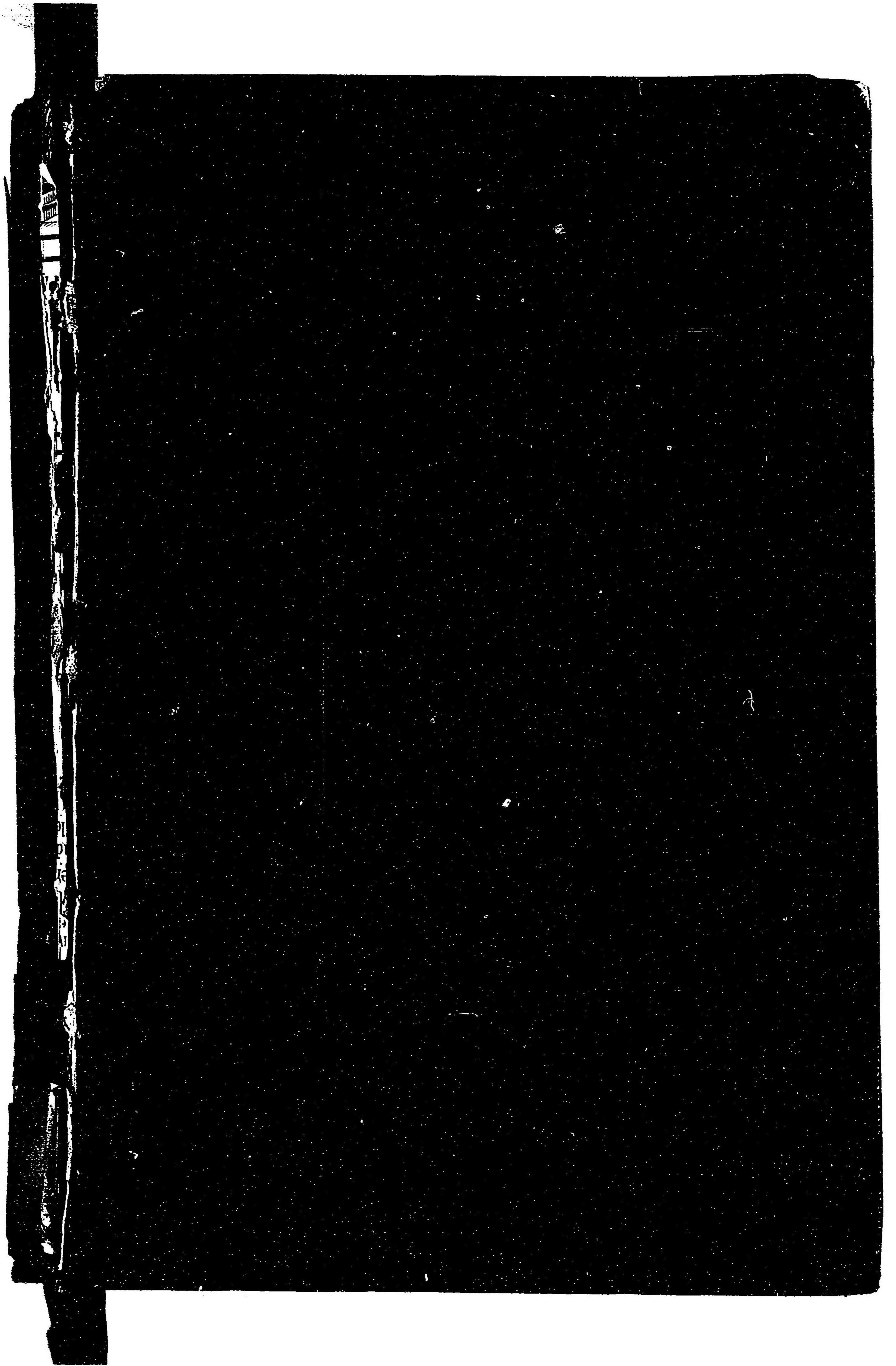
- | | | | |
|------|--------|--------|-----|
| 第三編 | 和歌 | 女子消息作 | 法範法 |
| 第四編 | 女子體詩作 | 新體詩作 | 法範法 |
| 第五編 | 女子普通文 | 女子普通文 | 法範法 |
| 第六編 | 女子俳句作 | 女子俳句作 | 法範法 |
| 第七編 | 女子通國文 | 女子通國文 | 法範法 |
| 第八編 | 女子口語文 | 女子口語文 | 法範法 |
| 第九編 | 女子修辭文 | 女子修辭文 | 法範法 |
| 第十編 | 女子文學者別 | 女子文學者別 | 法範法 |
| 第十一編 | 女子國文學 | 女子國文學 | 法範法 |
| 第十二編 | 女子國文學 | 女子國文學 | 法範法 |

259
150



(版初月八年九卅)

259
150



259
150

048745-000-9

259-150

女子遊学便覧

中村 千代松 / 編

M39

BEJ-0271



